

審議会等の会議の概要の記録

会議の名称	令和4年度 第1回甲州市戦略会議
開催日時	令和4年5月26日(木) 午後2時00分から午後4時10分
開催場所	甲州市市民文化会館2階 第3会議室
議題	<ol style="list-style-type: none"> 1 会議の進め方について 2 横内正史委員提案「しごと・ひと・まち」 3 グループ討議「2040年の農業のあるべき姿」 4 まとめ
出席委員	小林和人委員、土屋隆男委員、寺田秀昭委員、中村一政委員 中村猛志委員、古屋亮委員、松坂浩志委員、山下善雄委員 横内正史委員 <div style="text-align: right;">(五十音順)</div>
会議の公開又は非公開の区分	非公開
会議を一部公開又は非公開とした場合の理由	委員がより自由な発言をできるようにするため
傍聴人の数	—
審議概要	別紙のとおり
事務局に係る事項	出席者 政策秘書課3名(林リーダー、宮川、三森)
その他	

内容	次第に基づき以下のとおり進められた。
1. 開会	○事務局(林) 開会
2. 市長あいさつ	○鈴木市長あいさつ
3. 会長あいさつ	○中村会長あいさつ (鈴木市長退席)
4. 議題	
(1) 会議の進め方について	○事務局(林) 会議の進め方について説明。
(2) 横内正史委員の提案「しごと・ひと・まち」	○横内委員 「しごと・ひと・まち」について資料に基づいて説明。
(3) グループ討議「2040年の農業のあるべき姿」	○中村会長 「2040年の農業のあるべき姿」についてA班、B班に分かれてグループ討議をお願いする。 【A班】座長：古屋亮委員、小林和人委員、土屋隆男委員、山下善雄委員 【B班】座長：松坂浩志委員、寺田秀昭委員、中村一政委員、横内正史委員 グループ討議：午後2時50分から午後3時50分
(4) まとめ	○中村会長 グループ討議の内容について班ごと説明をお願いする。 【A班】 ○古屋委員 A班では、横内委員からお話いただいたものをベースとして話しながら、最終的に目指すところは人口増加であるということを確認し、そのためにはどうしたらいいか考えた。 当然稼げる農業は大事だが、従来型から脱却し、新たなビジネスモ

デルを展開してくというのは非常に難しいことであって、保守的な考え方があるところは特に難しい。いろいろ考えていくには、まず、外部の成功している方や新たな取り組みをしている方等新しい人たちも入ってきやすい環境を 2040 年に向けて考えていく必要がある。

具体的には、従来型の農業が進み、若者の定着が減っている中で、やはりスマート農業のような機械化への取り組みを先進的な事例として甲州市が率先してやっていく必要がある。外部の人たちとリンクしてソーシャルベンチャーのような形で利益がでる農業を実証的に施行しながら、従来型の農業等と組み合わせることが重要である。また、甲州市の農業景観はそれ自体が甲州市独自の資源である。この景観をいかに維持していき、いかに儲かる農業を目指していくか、非常に難しい命題の2つであるが、それに挑戦していく必要がある。最終的な私たちの結論としては、甲州市にある核となる施設である勝沼ぶどうの丘を最大限活用していくことである。そこで儲かる農業をサポートする。例えば、6次産業化に向けた加工場、販路や企画というものをお互い担いながら、新規参入者がそこで何かできる仕組みを考えていく。また、農業のDX化についても、個々の農家での対応は困難であるので、核となって担っていくのが勝沼ぶどうの丘なのではないかと考える。

【B班】

○松坂委員 まず甲州市の一番大事ところは、景観である。今の状態で人がいなくなると耕作放棄地が出てきて、景観が崩れる。景観を維持する方法を基本的に考えていかないと、甲州市の今後の戦略策定は難しいのではないかと。景観は畑で出来ている。景観を維持するには、農地をどう守るのが一つの大きな課題である。農地を守る方法については、いろいろと議論がされ、今後も細かい方法はいろいろと出てくると思うが、その中のひとつに、農地の流動化というものがある。農地が流動化すれば、農地を守る人がでてくる。そこに、農業を知ることができる教育機関のような管理センターがあれば、働き方が分かり、農業生産できるような好循環が生まれる。それによって農業が継続的に続けられ、景観が守られる。大枠ではこのような話でまとまった。具体的には、農地が流動化するには、法人が農地を持てるようにするとか、農地を出資して配当するような仕組みや、農業の指導をできるような教育機関をつくる等の意見

<p>5. その他</p> <p>6. 閉会</p>	<p>が出た。つまり、農地を持てる仕組みをつくり、農地を維持できるような人を育成する場があることによって、景観が維持される。そうすることで、甲州市の戦略が今後も継続できると考える。また、農業の所得について、以前から1千万円農業というものが言われてきたが、全員が1千万円を必要わけではないという話も出ていた。それは、年金受給にプラスして農業をする老後の考え方の中で継続していく例もあるからである。一方で、山梨市にある法人は、県内の耕作放棄地や担い手がいない畑を集めて、社員3人とアルバイト70人で年商1億5千万円を売り上げている。そういう法人が育つような土壌があってもいいのではないか。農地が流動化するような仕組みができれば、大型農業をやる人たち、または小さなかたちで老後の農業をやる人たちで、景観を守り、継続していけるのではないかと考える。</p> <p>○中村会長 それではこれで議事を終わらせていただく。</p> <p>○事務局（林）連絡事項等特になし。</p> <p>○寺田副委員長 閉会</p>
----------------------------	---